フランス革命から9年後

——「ティンターン・アベイ」における時間意識——

小　林　　徹

I

フランス革命勃発後、一種の強迫観念のようにその直接の推進者たちが行ったことのひとつに進行中の革命運動の正当化がある。それは字義通りにも比喩的にも歴史的といえる現在という時の様態の肯定作業であるため、そのさい時間あるいは歴史に対する明晰な感覚が必要であった。“ancien régime”という語は、そうした必要性を背景に生まれた新語にほかならない。彼らは、その語を繰り返し言い立てるなかで、現在の革命を正しきものとして過去から断絶された時間相のもとに定立しようと努めたのである（Hunt 12-13, 48-51)。そしてその正しさを二度の帯仏経験において感得したのが、若き William Wordsworth である。ところが当初の熱狂に反し、彼はやがて革命に失望する。そこで詩人の革命に纏わるそうした経緯に立ち、“Lines written a few miles above Tintern Abbey”(1798) を読むと気掛かりな点がみえてくる。創作の日付が、バスティーユ監獄陥落の記念日前夜にあたるだけではない。注意を引くのは、詩に表されている時間に関する意識である。それはすぐれて政治的社会的な意識といってもよい。しかもさらに興味深いことに、その時間意識はそうした意味合いをもつ点からも、ワーズワスの自己の問題および彼の後の詩人としてのありかたと無縁ではないのである。本稿ではこれらのことを検討する。そして最後に、少なくともこの詩の創作時期辺りでは、詩人の政治、社会に関する思索と彼の自己に関する思索は反発しあうのではなく、逆に親和的関係にあったことを指摘したい。そこで以下詩にみられる時間意識の様態の分析から始める。

II

「ティンターン・アベイ」の詩人にあっても、己の現在をいかに定立するかが問題である。冒頭より彼の精神には常に時間に対する感覚が付き纏う。第一段落はこうである。

Five years have passed ; five summers, with the length
Of five long winters ! and *again* I hear
These waters, rolling from their mountain-springs
With a sweet inland murmur. — Once *again*
Do I behold these steep and lofty cliffs,
Which on a wild secluded scene impress
Thoughts of more deep seclusion ; and connect
The landscape with the quiet of the sky.
The day is come when I *again* repose
Here, under this dark sycamore, and view
These plots of cottage-ground, these orchard-tufts,
Which, at this season, with their unripe fruits,
Among the woods and copses lose themselves,
Nor, with their green and simple hue, disturb
The wild green landscape. Once *again* I see
These hedge-rows, hardly hedge-rows, little lines
Of sportive wood run wild ; these pastoral farms
Green to the very door ; and wreathes of smoke
Sent up, in silence, from among the trees,
With some uncertain notice, as might seem,
Of vagrant dwellers in the houseless woods,
Or of some hermit's cave, where by his fire
The hermit sits alone. (1-23 強調は筆者による)

描き出されるワイ河の情景はいわば時間の折れ目として機能している。再訪を

意味する“again”の多用が示すように、風景を構成する様々な事物を軸に、詩人の現在と五年前の過去が幾度となく重なり合う（Kroeber 32）。ついで第二、第三段落では、五年前に見たワイ河の光景が、想起を通じて都会にある詩人を慰めたことが語られる。そして第四段落以降、こうした特別な風景に纏わる知覚や記憶が、特にその現在に焦点をあわせた時間に関する主観的思索へと彼を導く。その辺りをより詳しくみてみよう。

第四段落は、五年前の様子が突然詩人に蘇る場面から始まる。

> And now, with gleams of half-extinguish'd thought,
> With many recognitions dim and faint,
> And somewhat of a sad perplexity,
> The picture of the mind revives again : (59-62)

このとき彼に“perplexity”が伴うのは、現在の自分が五年前の自分とは異なることに起因する。詩人は変化した。以前、彼には自然は“all in all”（76）と感じられた。けれども、“That time is past, /And all its aching joys are now no more, /And all its dizzy raptures”（84-86）と打ち明けられるように、その経験は今は得られない。しかし、詩人は落胆の境遇にあり続けたのではない。失われた過去を補うべく、“Abundant recompence”（89）があると彼はいう。逆説的にも、この「代償」の獲得は彼の自然の見方の変質、つまり、かつての感受性の喪失に依る。やがて彼は自然のなかに、“The still, sad music of humanity”（92）を聴き、“A presence that disturbs me with the joy/Of elevated thoughts”（95-96）を感得することが可能となる。そしてこの代償の実感が、詩人自身に関する独特の時間意識の認識へと彼を促すのである。自然への新たな感受性について述べた後、間を置かず彼はこう続ける。

> Therefore am I still
> A lover of the meadows and the woods,
> And mountains ; (103-05)

引用の要点は“still”にある。この語により、詩人が以前から自然を「愛する人」であり続けていることが明示される。すなわち、過去のある時点から現在に至るまで不変の存在としての自己が表象されるのである。しかも、五年前の自分の様子が語られる詩行には“love”という言葉の縁語が多々みられることから、初めてワイ河を訪問した時点での詩人も自然を「愛する人」とみなすのは別段奇異ではない（Maniquis 373）。[1] 従って、ここで表されているのは、詩人が自らに関して抱くいわば直線的な時間性の意識である。そしてこの意識が支配する限り、いうなれば弁証法的に、先に吐露された五年前の過去の喪失あるいはそれとの断絶感は解消される。詩人の現在は、質的に過去から連続するところにあるのだ。そしてアイデンティティに纏わるこうした時間意識は、続く最終段落でも語られることになる。

詩人は周到である。彼は、たとえ「代償」の存在が仮構であっても、自分の“genial spirits”（114）が朽ちることはないと言明する。その根拠は、詩人によれば、彼には同じワイ河の風景を見る妹がいることにある。突き詰めていえば、彼女が詩人について後に思い出すであろう内容が彼に安心を齎す、すなわち、それにより精神は衰微を免れるのだ。そこで注目するのは、妹による忘却を彼が否定する想起内容の一部である。それは詩人の言葉ではこのような事柄だ。

> . . . I, so long
> A worshipper of Nature, hither came,
> Unwearied in that service : rather say
> With warmer love, oh ! with far deeper zeal
> Of holier love. (152-56)

ここで重要なのは、冒頭の“so long”である。前出の“still”と同様、これも時間的継続性を意味する。詩人は「長いあいだ、自然の崇拝者」であり続けているのだ。しかも155行と156行に“love”という語が繰り返し用いられていることから、先程の第四段落での場合と同じく、“so long”が示唆する期間は五年

前の過去も包含し、よってここでも、詩人の現在は過去からの延長線上に位置することが明らかとなる。要するに、アイデンティティにかかわる連続的な時間意識が再度表現、いや強調されているのである。さらにまた、詩が形式上この言明をもち完結することから、詩人が自己像に関してそうした意識の正当性を表明しようとしていたことがわかるのである。従って、「ティンターン・アベイ」は詩人のアイデンティティの時間的連続性を語る詩であるとひとまず了解してよいだろう。しかしながら、詩にあって時間性が問題化されるのは独り詩人に限らない。彼の妹についてもそうなのだ。しかも彼女の場合、内実は詩人の場合とは異なる。詩人の捉えた、妹に纏わる時間意識は全く別様なのだ。次に第五段落について、今度は彼女に注目し分析する。

まず確認しておきたいのは、妹に関する箇所、その様式上の実態は、それが彼女自身による陳述ではなく、彼女についての詩人の解釈や推測から構成されることである。極端な例を挙げれば、それは、彼の言葉では、"in thy (sister's) voice I catch/The language of my former heart, and read/My former pleasures in the shooting lights/Of thy wild eyes" (117-20) といった行為である。詩人は妹の声や瞳に、かつての自分を読み取るのだ。そして、彼女についての詩行全体が本来的にこの様式に則るため、そこには必然的に詩人自身の思考が介入する (Jones, "Interpretation" 589)。そこでその最も顕著な箇所は、妹の行く末に関する部分であろう。自然はそれを愛する人を裏切らないという信念を語り、彼はこのように述べる。

. . . in after years,
. . . . . .
. . . Oh ! then,
If solitude, or fear, or pain, or grief,
Should be thy portion, with what healing thoughts
Of tender joy wilt thou remember me,
And these my exhortations ! (138-47)

未来の推測である限り、正確にはこれは妹に関する物語にほかならない。そしてここで注意したいのは、彼女が後に想起する対象である。上の詩行で、いわば心理的な危機的情況において妹が思い出すのは、詩人自身であり、今し方彼が述べた“exhortations”であると彼はいう。そして続く詩行で語られる別の想起行為でも、ほぼ同種の対象が求められるのだ。引用しよう。

Nor, perchance,
If I should be, where I no more can hear
Thy voice, nor catch from thy wild eyes these gleams
Of past existence, wilt thou then forget
That on the banks of this delightful stream
We stood together ; and that I, so long
A worshipper of Nature, hither came,
Unwearied in that service : rather say
With warmer love, oh ! with far deeper zeal
Of holier love. Nor wilt thou then forget,
That after many wanderings, many years
Of absence, these steep woods and lofty cliffs,
And this green pastoral landscape, were to me
More dear, both for themselves, and for thy sake. (147-60)

簡潔にいうと、彼女が思い出すのは、二人でワイ河の岸辺に立っていたこと、詩人が“A worshipper of Nature”として河を訪問したこと、そして再訪した詩人には河の風景は“More dear”と受け取られたことである。つまり、妹の想起する事柄は限定されている。常に詩人がその中心を占めるのだ。それも1798年7月13日、実際ワイ河を見ている詩人、すなわち形式上「ティンターン・アベイ」を創作する現在のワーズワスなのである。ここに彼の詩に多々みられる自己中心的特徴を指摘するのは可能だろう。妹の物語とはいえ、語られるのは、己に関する直線的時間意識であれ、自然との関係性であれ、確かに詩人自身のことだ（Jones, *Egotistical* 54-110 ; Izenberg 144-47)。しかし今重要なの

は、心理的に困難な情況に限らず、詩人の死後も、妹は兄の今日現在を忘れないと彼が断定している点である。いささか乱暴にいえば、妹は苦難のときには必ず詩人を想起するはずであり、しかも、そのさい記憶に求められるのは常に詩人の特定の過去なのだ。要するに、彼女はワイ河を再訪した詩人に回帰し続ける。そしてこの有様において、風景を見る詩人の現在は、妹にとり、救済手段という特別な意味をもつとともに、時間軸上特別な位置を有していることがわかる。つまり、本来的には刻々遠退いていく過去の一出来事であるとはいえ、彼の現在は、妹の心のうちでは、それと彼女が想起する時々の瞬間との経験上の心理的距離が常に一定である、そのような位置にあるのだ。そして詩人が妹の時間性についてこのように主張する限り、彼女の場合、詩人にあっては自己の定立にさいして重要であった、連続性という時間性は等閑視されていると考えてよい。反対にそこでは暗に、ある過去が時間軸上特別な位置にあるという意味で、時間の断続性が容認されているのだ。よって、我々はここに時間に関する別様の意識を認めることができる。さしあたり、詩人が記述する妹に纏わる時間意識は回帰的と呼べるだろう。そして興味深いことに、この意識は、第一章で触れたフランス革命の初期の当事者たちに分有されていた時間意識と照応するのである。運動開始直後より彼らは、改革を進める現在を際立たせ正当化するため、以前の封建制の時代を「旧体制」と命名することを通じて差異化し、否定した。その一方、同時に彼らは過去のある時代に新たに造られつつある正しき時代の理想像を捜し当てていた。古代ローマ時代がそれである。つまり、革命の推進者たちも、歴史的時間においての断絶の意識をもつと同時に、まさにその歴史のなかに回帰すべき時点を見出していたのである。[2] そしてこうした点に、この詩の時間意識のもつ政治的社会的意味合いの一端がうかがえるのだ。すなわち、妹に関する時間意識は、特別な過去への回帰的志向ならびにその前提でもある不連続な時間性の肯定といった側面において、革命の当初の主導者たちの時間意識を図らずも照出していたのである。それでは、詩に読み取れたもうひとつの時間意識についてはどうだろう。これまでのところ、対応する他の時間意識は見当たらない。ところが、詩人の自己に関する意識の場合、詩の創作時においてのフランス革命に対する彼の心理に目を向けるとき、

その照応物つまり政治的社会的性格をもつ別の時間意識がみえてくる。またそのさい、妹、Dorothy にあっての時間意識も、上述したのとは異なる様相のもとに照らし返されるのである。次章では、革命に根差すワーズワスの政治的社会的態度の確認から始めよう。

III

革命勃発を契機に始まる詩人の政治、社会に関する思索や行動は、その後九年間、激しい心理的振幅を伴うものであった。要点のみを述べれば、自由、平等、共和主義を旨とする“patriot”(Wordsworth, *Prelude* [1805] 9. 124) と自らを標榜するほど共感し歓迎した革命は、1793 年、Louis XVI の処刑と英仏開戦を機に、彼には理解を超えた事件と映るようになる。その後、英国内の改革派に対する政府による弾圧の激化 (Thompson, *Making* 116-63) も背景に、そうした不可解さは革命への失望へと変り、ほどなく彼は道徳的確信の喪失という危機的情況に陥る。そこからの脱却を模索する過程で幾何学に関心を示すのが 1796 年のこと。翌年、Samuel Taylor Coleridge との交際も深まり、そして彼との共作 *Lyrical Ballads* の出版で締め括られる 1798 年には、哲学詩、*The Recluse* の壮大な計画がおぼろげながらもかたちをなしていた (Gill 44-155)。そこで問題は、1798 年、ワーズワスは主にフランス革命に対してどのような意識を抱いていたかである。この頃、友人との親交や詩作への没頭により、革命に関する疑念や失望が一掃され、結果、精神的自律性は回復し、純然たる詩人としての心的基盤が確立されていたと考えるなら、事情は容易である。しかし、「ティンターン・アベイ」を巻末に置く『抒情歌謡集』が、すぐれて政治的な作品であることが判明している今日、その時点での彼を非政治的、非社会的人物と捉えるのはおよそ正確ではない (Smith 202-20 ; Rajan 136-37)。そこで私には、革命への失望というかつての事態に、当時の彼の政治的社会的心性の一端を理解する鍵があると思われるのである。そして、論を先取りすれば、「ティンターン・アベイ」創作の頃、ワーズワスは革命について再考の段階にあったのであり、そしてそのことは、詩にみられたふたつの時間意識と関係があるの

である。

直截にいえば、彼を最終的に失望へと至らしめる経緯の発端は、先述の1793年、革命政府による国王処刑ならびに英国、オランダ共和国への宣戦布告にある。ワーズワスはこのとき革命に対して初めて困惑する。なぜなら、当初彼には、革命は、社会の再構築を平和裡に進める、自由、平等、博愛の精神といった善き人間性に基づく崇高な理念を十分に体現する運動とみなされていたからである（Abrams 329-34；Friedman 71-91)。ところで、困惑の主因は必ずしも革命の理念や思想ではなかった。それは、翌年彼が、William Godwin の *Political Justice* の影響を経て、社会の民主主義的改革を目指す雑誌、*Philanthropist* の刊行を計画したことからもうかがえる（Reed 155-68；Thompson, "Disenchantment" 150-51)。不可解さの根拠は革命の進行にあった。運動が諸外国との戦争にまで発展した理由が彼にはわからなかったのだ（Sheats 75-79)。そして、フランス国内でのその後の恐怖政治の横行は、彼の理解不能の度合いを深めたに相違なく、詩人はついに革命に失望する(Wordsworth, *Borders* 246-69)。そこで、こうした経緯を経て1798年には、ワーズワスは革命について進行ばかりでなく、それを当初支えていた理念や思想にも失望あるいは疑問視するようになったと思われるのである。かりにまたそうであれば、勃発時の革命支持が理念と抱き合わせであったことから、この新たな困惑は、彼に1789年の出来事それ自体の正しさをも疑わせるに足るものであったといえる。そして、このように考える根拠のひとつは、「ティンターン・アベイ」以前の詩作品にあるのである。1798年初頭の作品、例えば "The Pedlar" において、ワーズワスは宇宙全体に遍在すると同時にそれを統合するいわば神的な精神、"One Life" の思想を提示する（Newlyn 34-44)。これは『隠遁者』の基底的主題と目されるほど、彼には重要な思想であった(Roe 233)。そして、実はこの"One Life"は、ワーズワスの場合、彼が当時依然抱いていた理想社会建設という願望を支える哲学的理念にほかならなかったのである（Garber 98-101)。そこでこうしたことから読み取れるのは、理想社会構築にあたり、"One Life"の思想がフランス革命の理念の代用として十分機能すると彼が判断したことだけではない。実際それが採り上げられ深く考察されようとしていた事実は、詩人にはか

つて、革命の理念に対して疑問視から棄却に至る思考過程があったことを示唆するのである（Johnston xv ; Watson 61-65)。そして“One Life”は「ティンターン・アベイ」にも見出せるのだが、しかしそこでは、先に挙げた二作品とほぼ同時代であるにもかかわらず、その正当性が手放しに主張されているとはあながちいえないのだ。詩人がそれについて語っていたのは、五年前の自分の喪失感を相殺する「代償」としてである。彼によるとそれは、“A presence that disturbs me with the joy/Of elevated thoughts”（95-96）であり、“a sense sublime/Of something far more deeply interfused, /Whose dwelling is the light of setting suns, /And the round ocean, and the living air, /And the blue sky, and in the mind of man”（96-100）であり、また“A motion and a spirit, that impels/All thinking things, all objects of all thought, /And rolls through all things”（101-03）でもあるという。ところが注目すべきは、“One Life”についてのこうした詳述の後、ほどなく詩人が“perchance, /If I were not thus taught”（112-13）と続けること、つまり、彼が「代償」たるその思想の真実性を転覆させる口振りをみせることである。ここに“One Life”について極めて不確かな見解を抱く詩人が露呈する。そしてこの揺らぎは、当の思想が理想社会建設にさいして必ずしも適当かつ十分ではないというワーズワスの判断を意味するのである（Wordsworth, *Music* 216-41)。この限りにおいて、当時彼には再度その理念も含め革命それ自体が思索の対象として立ち現れていたと考えられるのである。それから、これに加えて、想起という詩の主たる心的機構に則り、彼の精神に 1793 年初めてワイ河を訪れたときに抱いていた革命の進行に対する疑いや困惑も蘇ってきたこと（Kelley 59）を勘案するなら、以下のようにいえるのではないか。1798 年初夏においてのワーズワスの政治的社会的心性と、詩に表されている二様の時間意識は決して無関係ではない。それどころか、それら時間意識の併存は、革命に対する彼の思索の有様を反映してもいるのである。それはこういうことだ。端的には、そのときの彼の再考は以下のような疑問に集約されると思われる。つまり、諸外国との開戦に象徴される革命の暴力的進行を見据えるとき、はたしてしかるべき理念や思想に支えられた、勃発それ自体も含む初期の革命運動は正しいものであったかである。[3] もし正しい

とすれば、革命の悪しき進行は偶発的に発生した不測の出来事として理解される。また、その逆であれば、初期段階も後の展開もすなわち革命全体は悪しきものとなる。この二者択一をこれまで本稿で用いてきた言い回しに倣いいいなおせば、ある時間とそれ以前のある時間は、それらのあいだでの連続性の欠如という意味で、不連続の関係にあるのか、それとも連続的関係にあるのかとなる。しかしながら、先に指摘したように、革命の理念や思想に対する評価の不確かさを根拠に彼自身初期段階の革命運動について正当性の判断が不可能であるため、ワーズワスは到底この疑問の解決には至らないのだ。そしてこうした未決の心的情況が、詩における二種類の時間意識の併存というかたちと共鳴し合うと考えられるのである。従って、本章に課せられた問い掛けに答えれば、詩人の時間意識は、1798年7月13日、フランス革命の悪しき進行のいわば起源について彼が下せないでいた、判断の未決状態の一端と照応していたのである。

IV

「ティンターン・アベイ」にみられた直線的、回帰的といった二種類の時間意識は、各々革命に纏わる詩人や直接の推進者たちの時間意識と照応する点で、政治的社会的含意を有していた。そして、詩における両者の併存は、革命に対して詩人が再考の途上にあることを反映していたのだが、そのことは彼にとりさらに重要な問題ともかかわっていたのである。最後にこうした意味合いをもつ併存、言い換えれば、併記という形態が、詩人の自己に関する問題およびこの詩以降の彼の方向性とも無関係ではないことを検討したい。

まず確かめたいのは、双方の時間意識のあいだに価値的差異あるいは序列が見出せるかどうかである。詩が詩人自らの言葉で構成されている以上、それは妹に関する時間意識と彼とのいわば相対的距離を見定めることでわかるだろう。そこで、第五段落、妹について述べられる場面を想起したい。詩人は自らの精神が存続する根拠として妹を語っていた。ところで、第二章で指摘したように、妹に関する詩行は大部分、彼女についての詩人による解釈や推測からなり、従ってそれは彼の想像力が産出した彼女の物語にすぎない。よって、詩人

の捉えた妹に関する時間意識、すなわち回帰的な時間意識は虚構性を有することが自明となる。一方、詩人自身に関する時間意識はどうか。結論からいえば、同様それも虚構性を帯びると考えられるのである。理由のひとつを挙げよう。ワーズワスは、己の時間的継続性を表明する、しかもそれを決定的に行うべく、「長いあいだ、自然の崇拝者」であり続けていると自己を定義した。ところが、その行為は、実のところ、妹の物語の内部、つまり虚構の枠組みにおいてであった。むろんこの事実のみから、詩の言語が詩人の自己を表象する、すなわち、提示されるアイデンティティはワーズワスの言語による構築物であると断定するつもりはない。しかし、自己を表現する言語がほかならぬ物語を構成する言語である限りにおいて、自身に関する時間意識が虚構的側面を孕みもつことは十分指摘可能である。とすれば、両者は本来的な性質上価値的に同等であり、その意味では妹の時間意識にしてさえ、それは詩人に対して自らの時間意識と等距離にあるといえよう。そしてこうした関係にある二様の時間意識の併存は、先の詩人の政治的社会的心性に加えて、時間という領域での自己のあるべき像に関する当時のワーズワスの問題意識を表すと思われるのである。というのも、まず明らかにこの頃、自己像と時間の関係性は「ティンターン・アベイ」での内容を突き抜け、彼の精神を支配しつつあるひとつの問題的主題であった。我々は、『抒情歌謡集』出版直後、彼が自伝詩、*The Prelude* (1799) の創作に着手したことを知っている。つまり、その時期のワーズワスには、自己を時間の視点から振り返る態度、換言すれば、自らの時間、特に過去と現在との関係についての問題意識が確実に存在していたのである (Magnuson 154-57)。そして後の『序曲』において詩人が「ティンターン・アベイ」にみられた二種類の時間意識を再び採り上げ、さらにそれらの融合を試みることを考え併せれば、後者の詩での時間意識の併記は、彼が当時抱いていた自己と時間に関する問題性、それも今後解決されるべく存在していた問題性の様態を示しているといえるのである。事実、『序曲』の議論において中核となるのは、"spots of time" (Wordsworth, *Prelude* [1805] 11. 257) と呼ばれる、精神が活性化を希求し回帰する特別な過去の諸経験であったし、また、そうした過去との有機的関連性を再考しつつ自己の時間的統一性を確認することが、ワーズワスの『序曲』

創作の主目的でもあったのである（Lindenberger 143-56 ; Stelzig 129-82)。それから、先章で触れたように、彼の詩作活動はフランス革命への困惑、失望を境に活発化したのだが、その内情にあっては、詩人は革命への疑念を忘却し、自らを改めて律するために詩作に没頭したのではない。逆にそうした困惑などは、詩作すなわち、より突き詰めていうなら、上に指摘したような自己の時間的探究と連動していたと考えられないか。なぜならまず、既にみたように、詩人によるフランス革命の再考は主に時間性あるいは歴史についてのものであり、しかもその思索の有様は、時間の連続性と不連続性といった事柄にその焦点をもつ点で、詩人の自己に関する問題意識のありかたと明確に合致するのである。さらに、実際革命それ自体は、彼の自己ならびに時間の問題と密接に関係するべくいわば運命付けられていた社会的政治的出来事であったのだ。というのも、後の『序曲』は、彼にとっての革命の意味を再考する場でもあり、換言すれば、そこでは革命は自らのアイデンティティにかかわる重大な問題として、詩人自身の歴史意識のもとに捉え返されることになるからである（Chandler 31-61 ; Arac 53-54)。従って、「ティンターン・アベイ」創作の頃あるいはその後も、ワーズワスの自己への思索とその政治的社会的思索は密接に関連していたといえるのである。

結局のところ、詩にみられた二様の時間意識の併存という形態は、詩人による政治、社会そして自己に関するといった相互に関係する二種類の思索の有様を端的に表象していたことになる。しかもこの詩は、それらの思索が抱えていた問い掛けにおいて、ワーズワスの詩人としての今後を暗示していたのである。この限りにおいて、革命という過去は、彼にとり単に政治的社会的考察の対象であるばかりでなく、自らの現在を思考するための契機であり、さらにその未来の方向を示す指標でもあった。そしてその方向とは、『序曲』の創作において実現されるはずの、政治的社会的側面も含む自己と時間の関係性に関するより広汎かつ深い思索である。「ティンターン・アベイ」は文字通り『序曲』の序詩であったのだ。ところがワーズワスは「ティンターン・アベイ」の直後から開始した『序曲』を約五十年間にわたり改訂し続け、最終的にその自伝詩は死後出版を意図されるに至る。こうした経緯を導いた原因の一端は、彼には直線的、

回帰的といった時間意識の融合が困難な企てであったことにあるのかもしれない (Jay 74-82)。また、そもそもこれらの意識は、連続的か否かという彼の革命再考と関連する限りは、背離の関係にあるのであり、従ってその点では双方の融和などありえないことなのだ。とまれ、結果的に時間意識に関する詩人の思索は、決して解決されない行為として生涯彼に残存したといえるだろう。

注

1 五年前の自分の様子を語る詩行はこうである。なお、強調は筆者による。

And so I dare to hope
Though changed, no doubt, from what I was, when first
I came among these hills ; when like a roe
I bounded o'er the mountains, by the sides
Of the deep rivers, and the lonely streams,
Wherever nature led ; more like a man
Flying from something that he dreads, than one
Who sought the thing he loved. For nature then
(The coarser pleasures of my boyish days,
And their glad animal movements all gone by,)
To me was all in all. — I cannot paint
What then I was. The sounding cataract
Haunted me like a *passion* : the tall rock,
The mountain, and the deep and gloomy wood,
Their colours and their forms, were then to me
An *appetite* : a *feeling* and a *love*,
That had no need of a remoter charm,
By thought supplied, or any interest
Unborrowed from the eye. — That time is past,
And all its *aching joys* are now no more,
And all its *dizzy raptures*. (66-86)

2 改めて指摘するまでもなく、革命の推進者たちのこうした回帰的な時間意識を

顕著に体現していたのは、革命運動のさなか頻繁に催された儀式や祭典であり、Jacques Louis David を領袖とする当時の芸術作品である（Hunt 28-31, 60-61；Paulson 10-18；スタロバンスキー 68-89, 134-36）。

3　この疑問の立て方については、Hartman 123-35、Liu 148-63 に負う。

引用文献

Abrams, M. H. *Natural Supernaturalism : Tradition and Revolution in Romantic Literature*. 1971. New York : Norton, 1973.

Arac, Jonathan. *Critical Genealogies : Historical Situations for Postmodern Literary Studies*. 1987. New York : Columbia UP, 1989.

Chandler, James K. *Wordsworth's Second Nature : A Study of the Poetry and Politics*. Chicago : U of Chicago P, 1984.

Friedman, Michael H. *The Making of a Tory Humanist : William Wordsworth and the Idea of Community*. New York : Columbia UP, 1979.

Garber, Frederick. *Wordsworth and the Poetry of Encounter*. Urbana : U of Illinois P, 1971.

Gill, Stephen. *William Wordsworth : A Life*. Oxford : Clarendon, 1989.

Hartman, Geoffrey H. *Wordsworth's Poetry, 1787-1814*. 1964. New Haven : Yale UP, 1971.

Hunt, Lynn. *Politics, Culture, and Class in the French Revolution*. 1984. Berkeley : U of California P, 1986.

Izenberg, Gerald N. *Impossible Individuality : Romanticism, Revolution, and the Origins of Modern Selfhood, 1787-1802*. Princeton : Princeton UP, 1992.

Jay, Paul. *Being in the Text : Self-Representation from Wordsworth to Roland Barthes*. Ithaca : Cornell UP, 1984.

Johnston, Kenneth R. *Wordsworth and* The Recluse. New Haven : Yale UP, 1984.

Jones, John. *The Egotistical Sublime : A History of Wordsworth's Imagination*. London : Chatto, 1954.

Jones, Mark. "Interpretation in Wordsworth and the Provocation Theory of Romantic Literature." *Studies in Romanticism* 30 (1991) : 565-604.

Kelley, Theresa M. *Wordsworth's Revisionary Aesthetics*. Cambridge : Cambridge UP, 1988.

Kroeber, Karl. *Romantic Landscape Vision : Constable and Wordsworth*. Madison : U of Wisconsin P, 1975.

Lindenberger, Herbert. *On Wordsworth's* Prelude. Princeton : Princeton UP, 1963.

Liu, Alan. *Wordsworth : The Sense of History*. Stanford : Stanford UP, 1989.

Magnuson, Paul. *Coleridge and Wordsworth : A Lyrical Dialogue*. Princeton : Princeton UP, 1988.

Maniquis, Robert M. "Comparison, Intensity, and Time in 'Tintern Abbey.'" *Criticism* 11 (1969) : 358-82.

Newlyn, Lucy. *Coleridge, Wordsworth, and the Language of Allusion*. Oxford : Clarendon, 1986.

Paulson, Ronald. *Representations of Revolution (1789-1820)*. New Haven : Yale UP, 1983.

Rajan, Tilottama. *The Supplement of Reading : Figures of Understanding in Romantic Theory and Practice*. Ithaca : Cornell UP, 1990.

Reed, Mark L. *Wordsworth : The Chronology of the Early Years, 1770-1799*. Cambridge Mass. : Harvard UP, 1967.

Roe, Nicholas. *Wordsworth and Coleridge : The Radical Years*. 1988. Oxford : Clarendon, 1990.

Sheats, Paul D. *The Making of Wordsworth's Poetry, 1785-1798*. Cambridge Mass. : Harvard UP, 1973.

Smith, Olivia, *The Politics of Language, 1791-1819*. 1984. Oxford : Clarendon, 1986.

ジャン・スタロバンスキー『フランス革命と芸術——1789年 理性の標章——』井上堯裕訳、法政大学出版局、1989年.

Stelzig, Eugene L. *All Shades of Consciousness : Wordsworth's Poetry and the Self in Time*. Studies in English Literature 102. Hague : Mouton, 1975.

Thompson, E. P. "Disenchantment or Default ? : A Lay Sermon." *Power and Consciousness*. Ed. Conor Cruise O'Brien and William Dean Vanech. London : U of London P ; New York : New York UP, 1969. 149-81.

———. *The Making of the English Working Class*. 1963. Harmondsworth :

Penguin, 1980.

Watson, George. "The Revolutionary Youth of Wordsworth and Coleridge." *Critical Quarterly* 18 (1976) : 49-66.

Wordsworth, Jonathan. *The Music of Humanity : A Critical Study of Wordsworth's "Ruined Cottage."* New York : Harper, 1969.

———. *William Wordsworth : The Borders of Vision.* 1982. Oxford : Clarendon, 1984.

Wordsworth, William. *The Prelude, 1799, 1805, 1850.* Ed. Jonathan Wordsworth, M. H. Abrams, and Stephen Gill. New York : Norton, 1979.

Wordsworth, William, and Samuel Taylor Coleridge. *Lyrical Ballads : The Text of the 1798 Edition with the Additional 1800 Poems and the Prefaces.* Ed. R. L. Brett and A. R. Jones. 1963. London : Methuen, 1968.

Synopsis

Nine Years after the French Revolution : Consciousness of Time in "Tintern Abbey"

By Toru Kobayashi

Recently it becomes rather curious to regard William Wordsworth as a non-socio-political figure, even while he was composing his major poetry. In this paper on "Tintern Abbey," investigation is made through two types of consciousness of time as seen in the poem. Both of these are highly, though not conspicuously, charged with the significance of the society and politics which was one of the poet's concerns around the time of its composition. And closely related with this bearing, they reflect the problematic growing of his self, that is to become the crucial poetic theme which Wordsworth grappled again and again in his life as a Romantic poet.

The historical change of his attitude toward the French Revolution is well known. It was its violent progress, the execution of the French King and declara-

tions of war with foreign nations, that drastically converted his evaluation of it from ardent hope to object despair. On 13th of July, 1798, he was not yet emancipated from the various ideological anxieties that were intrinsically rooted in the outbreak of the Revolution in 1789. In "Tintern Abbey," some of these tensions are perceived behind the two consciousnesses of time, one the poet's and the other his own sister's. The brother's consciousness is characterized by the successive progression of time which is reified in his insistence upon the continuity or unchangeableness of his self as "A worshipper of Nature." On the other hand, the poet deliniates his sister's consciousness as cyclical. In the future, whenever a psychically critical moment happens to her, she will remember, or return to, the unique past — the experience that she, with her brother, stood on the banks of the Wye and heard his "exhortations." And the consciousness of time concerning her corresponds genuinely to the sense of time which was shared by the first generation of the French Revolutionaries, that has its main point in their wish to return to ancient Rome. Then, in the poem, the presence of these consciousnesses, equivalent in value, reflects the conflict of the "reformist" Wordsworth who was confronted with the vicissitudes of the Revolution. While composing, he was reconsidering the authenticity of the event, still embarrasing because of his abiding incapacity for discerning the chief reason of its violent progress : whether "the Terror" had its origin in the ideas or philosophies which, he thought, had supported the Revolution when it occured, or it befell as an unpredictable happening without any relation to those ideas. In other words, towards the Revolution, he felt division within between the successive and causal movement of temporality and its intermittent progression, on which cyclical time is necessarily based. It is this mentality that is correspondent to these consciousnesses.

The presence of two consciousnesses of time also reflects the problematic of Wordsworth's self in relation to time. We know that he began *the Prelude* soon after the writing of "Tintern Abbey." And later in that autobiographical poem, he would treat and integrate those consciousnesses : the cyclical which is to be represented in the spiritual action towards "the spots of time," and the successive

to be retained as his purpose to recognize the growth of his continuous self which has no meaningless period. Then, it can be said that "Tintern Abbey" already had involved the problematic nature of the poet's self in time which would be taken up more seriously later. And, when we bear in mind his social and political significance towards the Revolution, which lies behind the two consciousnesses of time, his reconsideration of the self interconnected with his ideological reflection, then could be regarded as one important formative background for the poet.